

# 化学教育 徒然草



## — 頂いた機会に思うこと —

KUBO Takaya

久保貴哉

東京大学先端科学技術研究センター 特任教授  
日本化学会 教育・普及部門 化学と教育誌編集委員会 委員長



次世代を担う若者に対する期待は、いつの時代でも変わらないことですが、時によっては無責任な言葉に聞こえないかと、気になることがあります。期待することと合わせて、将来活躍できる素地を作るための環境を整えることは、期待する側の役割の一つではないかと思うからです。このことは、「化学と教育」誌（以下、化教誌）の企画や編集に参加させて頂いていると、特に感じます。

教育や研究活動に従事しておられる教職員の方々の中でも、課外活動として、化学実験教室や、サイエンスショーなどの様々な企画や運営を通して、児童や生徒が科学技術の一端に触れる機会を作り、その面白さを伝える取り組みが、多くおこなわれています。本年3月に開催された日本化学会第99春季年会の際に行われた平成30年度化学普及活動功労者表彰からも、そのような活動が重要であることが分かります。

国内の学協会でも、教育に関連した機関誌が発行されていますが、とりわけ、化教誌は、小中高および大学、さらには産業界までの幅広い教育や人材育成に関わる情報や意見、考え方を発信することができる数少ない場を提供しているように思います。さらに、化学教育と関連した研究教育成果を、日本語で発表できる数少ない論文誌の一つでもあります。そのため、教育視点での価値評価が不可欠であり、中高教育への深い知見をお持ちの方々のご協力が必要になります。これまでも化教誌の編集に携わる中で、化教誌の編集体制が、中学校や高等学校、大学や研究機関、さらには産業界から構成されていなければならない意味が分かってきたように思います。

4年ほど前の化教誌の巻頭言「徒然草」で、「受け手のためにできること」と題して、同様の主旨の原稿を書かせて頂きました。本年3月に、化学と教育誌の編集委員長を仰せつかったところですが、あらためて、新しい時代を担う児童、生徒、学生に向けて、そして若い彼（彼女）らに日々接している教育現場の皆さんに向けて、化教誌だからこそできることを考える機会を頂いたと感じています。化教誌の発行には、多くの方々のご支援とご協力を頂かなければなりません。引き続きのご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

[連絡先]

153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1